The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	編輯を終へて
Author(s)	山本, 楢信
Citation	懐徳. 1935, 13, p. 59-61
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88942
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

參詣燒香し、内藤乾吉先生の御好意にて貴重の御藏書を拜見す。

▲六月二十七日

午後七時三十分より期末茶話會開催、出席者五十餘名、阪倉先生の能樂の話、成田先生の農業の話、武藤先生の外人旅行記に見ゆる豐臣時代並びに江戸初期の大阪の話、仲田君の和歌の話あり、丸山君詩賦を論じて楠公を詠ずる詩を朗吟、成田先生は即座に詩を作つて吟せられる。田中女史が詩吟の効能を説いて三勇士の詩を朗吟して批評を求め、吉田先生は寒山寺夜泊の詩を支那音で朗吟せられて興愈々湧く。時に雨聲蕭蕭として降る。太田君會計を報告、午後十時閉會する。

編輯終へて

山本楢信

世の中の人々は古きものに慊らず、新しく力强きものを求め賴らうとしてゐる。其の叫びに應へて雄々しく立ち上つたものこそ、我が日本帝國であつて、聖明なる若き　天子樣を上に戴き、正直に明朗に勤儉産を治め、東洋平和の爲め世界和平の爲めに、躍進を續けてゐる。黑色民族は野蠻なるが故に征服すべしと豪語し、或は天産豐富の他國の領土を占據して、我が物顏に振舞ふ白色民族は、却つて人の風上にも置けぬ品性の卑しき精神的劣等民族たることを暴露せるもので、塗炭の苦みにある生民を濟ひ、逆境にあられし皇帝を擁立し、五族協和の樂土を建設

せんとする我が滿洲事變に比して雲泥の差がある。我は勝つて傲らず正義人道に悖らず、常に反省しつゝ前進向上しつゝある、それでこそ身に反さうして縮くんば千萬人と雖も吾往かんの大元氣が出て來るのである。崇高の精神に基礎づけてこそ始めて眞の大發展を成し得るものであることは、我が大阪に就ても言ひ得る。

悠久の昔より以來三千年、大和山城の門戸となり、三韓隋唐と交通して大陸の文明を傳來し、商工業の中樞となりて權勢に媚びず、勇往邁進、能く有無相通じて自らも利し他をも利し、聖帝の都し給ふ處となり、英雄の天下に覇を稱する處となり、德川初期既に海外に雄飛する商人あり、三百年來安らけき眠りの夢破られし維新以後、國力の非常な發展に伴ひ、東亞に於ける

商工業の中心となり、最近に至りては世界に於ける物資を集散して、生產品の波及するところ、世界の隅々至らぬ所なからんとする勢である。此の大發展の裏面には、隱れたる敎育の偉大な力がなければならぬ。それは大阪の町人が協力して創立し、町人の品性陶冶に力を致すこと二百年、今復再興せられて已に二十年、日新月歩、聖經賢傳を講義し東西の學問を研究して倦むことなき我が懷德堂の存在によつて、其の一端を知ることが出來る。歷史に埋れたる事蹟を一々尋ねて列擧する暇を有せぬが、聖德太子が四天王寺を此の大阪の地に建立せられたのも、大楠公を育て豐公をして大を成さしめたのも因緣淺からず、大阪の人士の背景あつてのことである。我が懷德堂は斯樣の好學向上の精神と、實行尊

重の大阪根性を凝固して成れるものゝ一にして市民の修養大阪の文化に寄與するところ少からず、聽講者と嘗て聽講せし者との有志が、會員の親睦と本堂事業の翼賛を目的として團結せる我が堂友會の機關雜誌「懷德」も回を重ぬること十三、今回も前京大總長小西重直先生を初め諸先生の玉稿を賜はり、微弱なる我々の力で出來ぬ立派な會誌にすることの出來たことを感謝する次第であつて、會員諸兄を益すること亦多大であることを信ずる。故内藤湖南先生が日本の大學者を數へて、五指を屈すれば其の一に當ると激賞せられし舊懷德堂の生んだ我が大阪の町人學者富永仲基の遺文を、吉田鋭雄先生が拾輯せられて秘藏せらるゝを乞ふて掲載し、現代大阪の生んだ町人學者石濱純太郎先生の仲基に關する論說を併せ載せて、出定後語翁の文、及び多年探し索ねて不幸未發見の著述「說蔽」と共に、富永仲基全集の發刊せらるゝ機緣を作ることを得れば望外の喜びである。前號に續き舊懷德堂の記錄を附錄として湮滅を防ぎ、後世の人をして偲ぶ資料とした。來秋の再興二十周年には種々の記念事業を計畫してゐるので御援護を希望する。

吉田先生の懇切なる御力添えによりて、初めて本會誌が發刊せられたのであることを追記する。